

序

世にいう「グローバル化」は、ナショナル・ヒストリーの相対化を通じてなされ、近代以降、自己がネイション（民族・国民）の一員として立ち現れていることを、如何に自覚するかにかかっていると思います。

ネイションなる意識は、動物としての本能やそこに暮らす人の自然な感情から生まれたものではなく、制度のうえで住民が国家の主権者となった時から、「文化」なる概念を使い、政策的に創り出されてきました。

外国を理解するためには、自国のことも知らなければならないとし、自文化の探求に向かう、あるいはこれをステレオタイプ化し、「外国人」に「自国の文化」として紹介するとういう試みは、「国境」の壁を高くし、これをゆるぎないものにしてしまうことにならないでしょうか。

さしあたりは、教え込まれ、身体化された記憶の内容を点検し、これが特定ネイションの形成に如何なる形で貢献してきたか、また歴史的事実の選択が、陰に陽に、如何なる要請のもとになされ、「正史」として練り上げられてきたかを検証することから始める必要があります。

本論文集は2016年11月26日、こうした問題意識のもと、愛知大学人文社会学研究所所員の小野賢一准教授をファシリテーターとして開催されたワークショップ「国境を超える歴史学」での基調報告を収録したものです。

人文社会学研究所は産声をあげたばかりで、すべてが手探りの状態にあります。この会も、お招きした講師の先生方のご協力があったからこそ成立したようなものであります。基調報告およびコメントは、いずれも最先端の内容であり、こうして公刊させていただくことにより、近代歴史学の脱構築にかんする議論が高まることを切に願うものであります。

愛知大学人文社会学研究所

所長 伊東 利勝